

# 会話中での学習の達成

## —学習の達成を可能にするメタ語用的フレームに注目して—

李址遠(早稲田大学大学院生)

### 1. はじめに

社会的視点に基づく近年の第二言語習得 (Second Language Acquisition, SLA) の研究は、学習を社会的な行為として捉える諸理論に基づき、様々な場面における言語学習を記述・分析してきた。しかしここでは、分析者自身が、特定の理論に基づいて、何らかの行為を学習である (または、学習でない) と規定するメタ語用的実践に従事しているという認識は十分に共有されていない。社会的視点に基づく第二言語学習の研究は、認知主義のドグマから学習の概念を救い出すことを試みながら、同時に、新たなドグマを作り出しつつあるという二重性を有すると言える。

何らかの行為を取り上げ、それを学習として記述する研究という営みが、それ自体、社会文化的な実践であるとするならば、そのことを踏まえた SLA 研究はどう進むべきだろうか。特定の理論、特定の視点、特定のイデオロギーに基づいて学習を記述する以外の道はないのだろうか。本研究では、この問題に対する一つの可能性を提示することを目的とする。

### 2. メタ語用的実践としての学習の記述

学習は、進行中の過程としての学習と、その結果として達成された状態としての学習という二つの相 (aspect) から捉えることができる。学習の達成は、それに先行する学習の過程を前提とする一方、何かを学習の過程として記述することは、学習が達成できた状態への見通しを前提にする。これまでの先行研究では、過程としての学習の方に主な焦点が当てられ、「誰かが何かを学習できた」という状態への認識・判断がいかに成立するかという問題にはほとんど関心を向けてこなかった。学習に対する日常的・一般的な理解からすると、そのような判断を行う上で中心的な基準となるのは、誰かに何らかの「変化」が起こり、その結果が「持続」しているということであると言えるだろう。ただし、その判断にはさらに、変化の所在、変化を捉えるための同一性の同定、変化が向かう方向、生理的・生物学的要因の関与の有無、意図性の有無、変化結果の持続の程度など、様々な問題が関わっている。このことは、何かを学習である (または、学習でない) と判断し記述することが、特定の社会文化的視点を反映するメタ語用的実践であることを示唆している。

### 3. 先行研究における学習の記述

社会的視点に基づくこれまでの SLA 研究は、各々が基づく理論的枠組みに従って、相互行為に見られる特定の変化を第二言語学習 (主に学習の過程) として記述してきた。例えば、状況的学習論を援用する研究では、実践共同体への参加形態の変化を、社会文化理論を基盤とする研究では、第二言語を用いた自己統制の状態への移行を、会話分析を基盤とする (一部の) 研究では、相互行為能力の発達を、第二言語の学習として記述してきたのである。これらの研究が、学習の社会的行為としての側面を強調し、SLA を社会的な視点から捉え直す上で重要な役割を果たしたことは確かであるが、ここでは、学習を記述するという行為そのものが、特定の視点を反映する社会文化的実践であるという認識はなされていない。

一方、一部の会話分析の研究は、相互行為における「学習の達成」を記述するという、上記の諸研究とは異なる観点から学習の問題にアプローチしている。4 歳児のヴァイオリンのレッスンを分析した西阪 (2008) は、生徒が教師の教示通りにパフォーマンスを行って見せ、教師がそれに注目し肯定的に評価するという相互行為を通して、学習が子供に帰属されていく過程を記述している。一方、小学校の授業における「水遊び」の事例を分析した五十嵐 (2016) は、「学習が達成するという現象は、「ある行為を成し遂げた」というだけでなく、その行為を「学習した」ことが当の行為者へ帰属さ

<sup>1</sup> メタ語用 (metapragmatics) とは、語用に対する語用、すなわち、「実際に起こっている言語使用、あるいはコミュニケーション出来事やその要素を対象として指標する (指し示す) 言語使用やコミュニケーションのことである」(小山, 2009, p. 26)。Silverstein (1993) はメタ語用的機能を、「指標記号の群れを、相互行為における言語使用が構成する特定のタイプの解釈可能な出来事へと統制する」(p. 37) ものであると説明している。特定の理論に基づき、何らかの行為を「学習」であると記述することは、それを、学習という行為のタイプに属するトークンとして規定すること、すなわち、メタ語用である。

れることを伴うものである」(p. 181)としている。これらの研究は、分析者が何らかの行為を学習として記述するのではなく、参加者たちが相互行為の中で学習をいかに達成させていくかを記述するという新たな方向性を示唆している。ただし、西阪と五十嵐が分析したのは、学習の達成が参加者たちにとって主な関心事となる制度的場面であり、そこでは、学習の帰属が、参加者間の非対称的なアイデンティティー（教師 vs. 生徒）に志向する一連の相互行為を通してなされるものとして記述されている。しかし、学習が、あらゆる相互行為において起こり得るものであるという理解に基づくと、それらの研究が対象としたのは、学習の達成に関する（特殊な）一例に過ぎないと言えるだろう。また、それらの研究では、学習の帰属がなされるまでの相互行為のみが分析の対象となっており、一度なされた学習の帰属が、後に続く相互行為においていかに扱われるかは明らかにされていない。学習の達成をメタ語用という観点から捉えるなら、それは最終的な決定性を欠いたもの（Wortham, 2001）として扱われなければならない。学習の研究は、相互行為における変化の軌跡と、その持続のあり様を辿るだけの十分に縦断的な分析を要するのである。

## 4. 分析：会話における学習の達成

### 4.1 理論的枠組み

本研究では、相互行為の中で、「誰かが何かを学習できた」という状態がどのように創出されるかを、メタ語用的フレーム（cf. Goffman, 1974; 小山, 2016）に注目して分析する。メタ語用的フレームは、通常、それに明示的に言及する発話によってというより、出来事における様々な指標的記号が織りなす一定のパターンによって指標される（cf. Wortham, 2001）。参加者たちの行為は、一定のパターンをなすことによって関与的なフレームを指標し、同時に、そのフレームによって指し返されることによって意味の規定を受ける（小山, 2008）。このように考えると、相互行為を通じた学習の達成は、「教示通りのパフォーマンスを見せる→それに注目し肯定的に評価する」といった比較的明示的な相互行為によってだけでなく、メタ語用的フレームへの指標を通して、より間接的な形でもなされ得ると言えるだろう。

### 4.2 データ

分析に用いるデータは、初中級レベルの日本語学習者2人と日本語母語話者2人が約4ヶ月に亘って行った計12回の言語交換の会話の一部である。ここで注目するのは、使用言語を日本語から英語に替える際に用いられた「切り替える」という語の使用である。「切り替える」は、2回目の会話で初めて登場し、最後の12回目までの全ての会話に用いられており、使用言語を替える場面以外で用いられることは一度もなかった。

表1. 会話参加者

区分	名前	L1	L2	性別	年齢	その他
NNS	Y	韓国語	日本語 (初中級)	F	20	日本滞在期間：1年。中学2年から高校3年までアメリカに留学。
	K			F	20	日本滞在期間：1年。高校3年間タイの国際高校に留学。
NS	S	日本語	英語 (上級)	F	21	大学2年生の時1年間アメリカに留学。
	T			M	19	留学経験なし。

### 4.3 分析

#### 2回目の会話

1	Y: きりっかえる? K: 切り替える S: hhh そろそろ、切り替える? 3時半. T: (今何分...) 切り替えます(か)
2	Y: う:::ん. °スイッチ° K: (29) 着替える. 切り-切り替えるはスイッチ? °着替える(・・)° S: 着替える? うん. 切り替えるは: スイッチ. なんか 日本語か↑ら:, 英語- T: うん.
3	Y: う:ん. K: う:ん. °(・・)° 今から英語で き::り::かえる h h h h h S: に切り替える, とか. うん. う:ん. 切り替える hhh T:
4	Y: hhhh hh K: 切り替えま↑しよ↓う:: hhhh う:::ん (4) S: 切り替えましょう: hh is that your (0.6) (・・) pierce? T:

初めて「切り替える」という語が登場したこの会話をフレームの観点から見ると、そこでは、「言語交換のフレーム」と、その中に挿入された「教授・学習のフレーム」および「遊びのフレーム」という三つのフレームが同定できる。「教授・学習のフレーム」は、「切り替える」という語を巡る修復連鎖を通して指標されるもので、その中で参加者たちは、「教



全には学習できていない者として扱われているのである。

## 12 回目の会話

1	Y:			うん. 切り替える.	うんうん. 20分だったよ.	うんんん.	う:ん. hhh	
	K:						hhh .h:	
	S:	切り替える?				うん.	早いね	hhh
	T:					20分って早いですね.		
S:時間を見る								

12 回目の会話では、S が「切り替える？」と提案し、それに対して K が「うん. 切り替える.」と答えるだけで、使用言語の切り替えの交渉が終了する。そこには反復も、修復も、評価も、笑いも見られない。ここで K は再び、その語をすでに知っており、適切に使用できる者として扱われている。K の学習は再び（非明示的な形で）達成されているのである。

## 5. 考察

本研究が分析した会話では、回を重ねるにつれ、「切り替える」という語に焦点化する参加者たちの行為、そして、それによって指標される挿入的フレームが次第に姿を消していった。その過程を通して Y と K は、「切り替える」という語を適切に使用できて当然な者として（すなわち、それを学習した者として）指標されるようになっていった。Y と K の「切り替える」という語の学習は、そのような相互行為の構造（フレーム）の変化を通して達成されていったのである。このことは、西阪および五十嵐の研究において示されたものとは対照的である。本研究の分析は、「誰かが何かを学習できた」という状態が、学習に関わる行為への注目（焦点化）によってではなく、むしろ、そのような注目の無さによってなされることを示しているからである。簡略にまとめるなら、本研究が示した学習の達成を可能にするメタ語用的フレームとは、「学習の対象への焦点化をもたらす挿入的な諸フレームの、漸次的な不在への移行」であったと言える。

さらに本研究は、一度達成された学習が、後に続く相互行為のいかんによって取り消され得るものであることを示している。第二言語の学習が直線的・段階的な過程でないことは先行研究でもすでに指摘されている。しかし、本研究が示したのは、単なる学習過程の複雑さというより、学習をめぐる相互行為そのもののダイナミズムである。本研究は、「誰かが何かを学習できた」という状態が、相互行為を通して創出される指標的な効果であることを示しているからである。

## 6. 終わりに

本研究が、今後の SLA 研究に対して示そうとしたのは、「誰かが何かを学習できた」という状態が相互行為の中でいかに創出されていくかを、すなわち、相互行為における学習のメタ語用を記述するという分析の視点である。それは、あらゆる場面の相互行為において、誰が、誰の、どのような行為を学習である（または、学習でない）とするのか、それはどのような視点（イデオロギー）に基づくものであるかに目を向けさせる批判的な視点であると同時に、研究者が、学習を記述する自らの営みを反省的に捉えることを可能にする再帰的批判の視点でもある。SLA 研究は、そのような視点を備えることによって、十分に社会的（＝批判的）な研究として展開することができるのではないだろうか。

## 参考文献

- Goffman, E. (1974). *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*. New York: Harper and Row.
- 五十嵐素子 (2016). 「教示」と結びついた「学習の達成」：行為の基準の視点から 酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生・小宮友根（編）概念分析の社会学2：実践の社会的論理 ナカニシヤ出版 pp.177-194.
- Jakobson, R. (1960) Closing Statement: Linguistics and Poetics. In Sebeok, T. A. (ed.), *Style in Language*. Cambridge, MA: MIT Press. pp.350-377.
- 小山亘 (2008). 記号の系譜：社会記号論系言語人類学の射程 三元社
- 小山亘 (2009). シルヴァスティンの思想—社会と記号 小山亘（編）記号と思想 現代言語人類学の一軌跡：シルヴァスティン論文集 三元社 pp.11-203.
- 小山亘 (2016). メタコミュニケーション論の射程：メタ語用的フレームと社会言語科学の全体 社会言語科学, 19(1), 6-20.
- 西阪仰 (2008). 分散する身体：エスノメソドロジー的相互行為分析の展開 勁草書房
- Silverstein, M. (1993). Metapragmatic Discourse and Metapragmatic Function. In Lucy, J. A. (ed.), *Reflexive Language: Reported Speech and Metapragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 33-58.
- Wortham, S. (2001). *Narratives in Action: A Strategy for Research and Analysis*. New York: Teachers College Press.